大間野町 旧中村家住宅
「古い道具と昔のくらし」
展示解説

文教大学 教育学部社会専修

はじめに

住民たちが自らの足元を見つめ、生活の場である地域のありようを考える基となるものが資料館や博物館です。小中学校の社会科の学習では、地域の博物館・資料館の活用や連携を図り、子どもたちが実際にそこへ出かけて体験学習や調べ学習をする授業展開が必要とされます。残念ながら越谷市内には、そのような施設がない状況です。かつて旧見田方遺跡公園内あった郷土資料収納館は、レイクタウン地区の区画整備にともない廃され、収蔵資料類の多くが旧荻島公民館に保管されたままであり、その公開・活用が求められています。一方、大間野町・旧中村家住宅は、保存民家として整備が進められ、一般に広く公開されています。越谷市が保管している貴重な歴史民俗資料や保存民家の市民への有効活用を図るため、越谷市教育委員会生涯学習課と文教大学教育学部社会専修の協働により、大間野町・旧中村家住宅内の一部施設を利用して、「古い道具と昔のくらし」の展示を作成することになりました。特に今回の展示は、小学校３年・４年生の地域学習の単元「古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子」の学習で活用することを目的としました。本冊子は、主要な展示品および保存民家のつくりに関する解説です。今後は社会科の授業で、これら展示を活用するための事例案や調べ学習のワークシートなどを作成して、別冊子で提示していく予定です。

展示製作にあたっては、文教大学教育学部社会専修の学生 11 名を中心に、2016 年 8 月 30 日から 9 月 3 日まで旧中村家住宅で、農具民具類の整理調査を実施しました。その調査を踏まえ展示品を選定、キャプション作成を行いました。この協働事業の実施にあたっては、越谷市教育委員会生涯学習課文化財係の皆様に全面的なご協力いただきました。さらに、越谷市文化財調査委員各位にご協力・ご指導をいただきました。板垣時夫氏には埼玉県東部の低地における伝統的な農業や民俗等について専門研究をご教授いただきました。栗田孝夫氏には、学校現場で教鞭を執られている視点を踏まえて、社会科単元と連動させた展示構成のありかたについてご提言・ご指導をいただきました。今回は栗田氏のご提言をすべて実現することができませんでしたが、今後、学校現場をはじめ各方面のご意見・ご指導を仰ぎながらさらなる展示の整備・充実を行う予定です。長島正弘氏には、長年、郷土資料収納館の運営にたずさわってきた知識・経験をもとに、資料類の所在・活用方法についてご意見・ご支援をいただきました。村田三恵氏には、具体的な整理調査計画の立案や、関係者・関係諸機関との連絡・調整はじめとする協働事業の実務を担当していただきました。さらには民俗学に対する専門性、各地での豊富な学芸員活動を踏まえての学生への指導とともに、残暑の厳しい中で一緒に汗を流して整理調査あたっていただきました。村田氏のご尽力によって協働事業の実現が可能となりました。ここに改めてご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。本格的な資料館・博物館の展示には及びませんが、小学生がこの保存民家に訪問し、古い道具やそれを使用していた暮らしの様子を調べ、体験する学習活動を行い、さらに教室に持ち帰って社会科の学習に少しでも活用していただければ幸いです。

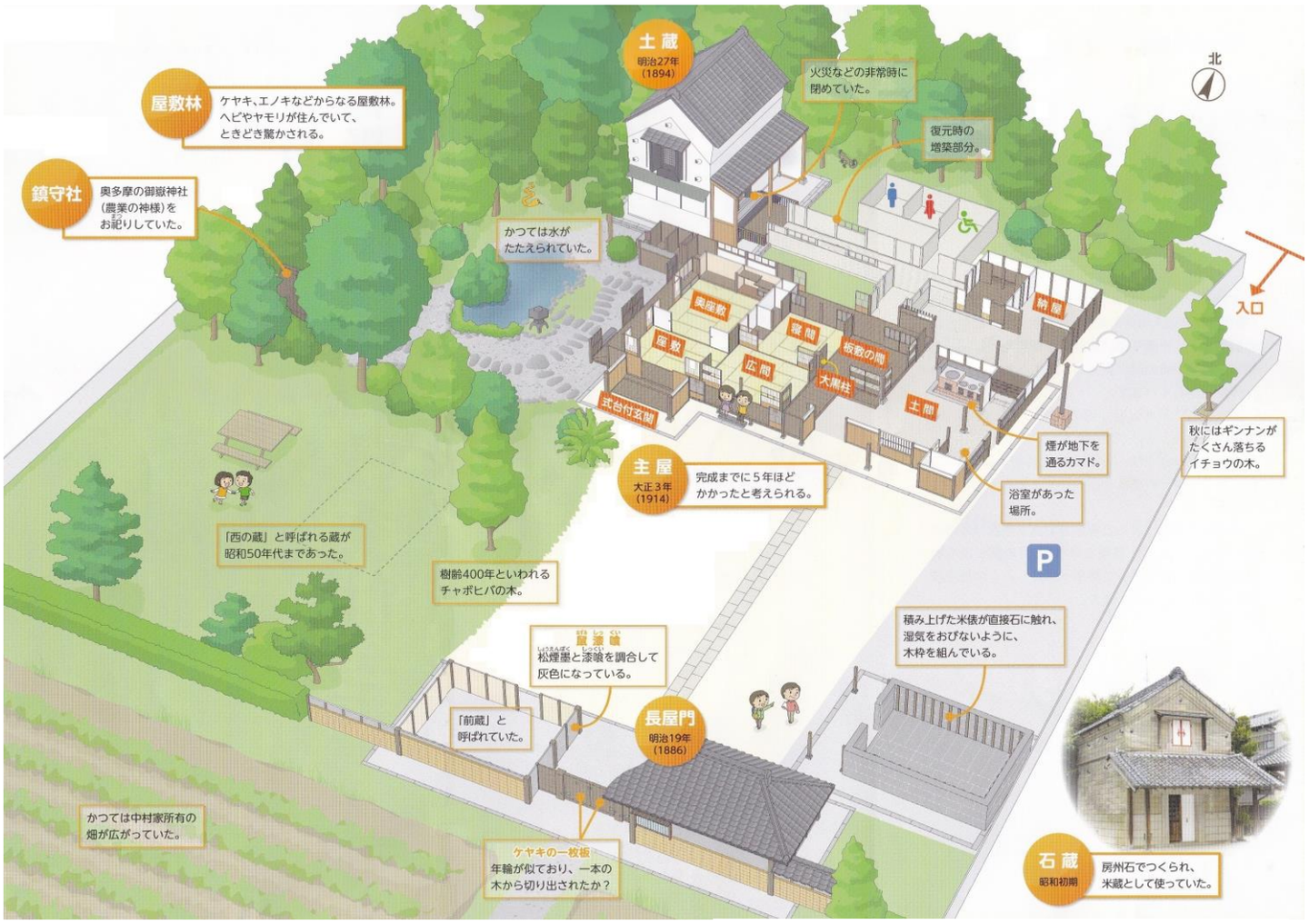
文教大学 教育学部社会専修　六本木健志

目 次　　頁

1　旧大間野村と中村家について　1
2　生活の道具　5
3　農具　～季節ごとの農作業（稲作）～　16
4　信仰　～屋敷に祀られる神々～　26
5　家屋と部屋のつくり　35

1　旧大間野村と中村家について

● 現在の中村家住宅のようす ●



（越谷市教育委員会の作成したパンフレットより引用）

● 中村家の歴史 ●

中村家は「四郎兵衛様」の屋号で呼ばれ、家伝によると豊臣方の小西行長の家臣で、関ヶ原合戦後に徳川方へ従い、兄弟及びその一族郎党と共に関東に移住し、この地を開拓したと伝えられています。代々中村四郎兵衛を名乗り、江戸時代には旧大間野村の名主を勤めていた。大間野の真言宗寺院、真龍山光福寺（善賀[寛永 18 年 1641 年寂]が開山）は中村家の菩提寺であり、その開山にあたっては江戸時代初めに同家が境内地を提供したと伝えられています。

江戸時代中期には当主四郎兵衛が大間野村の名主とともに、伊奈代官所の郷手代も勤めていました。郷手代は代官所が管轄する村々の有力者から選ばれ、年貢徴収や諸通達を村々に伝える役職で、名字帯刀が許されていました。

幕末には中村家の西の蔵に上野彰義隊の残党を匿い、手当ての後に会津へ逃がしたことや、明治維新後まもなく有栖川宮が黒田清隆・桐野利秋などと共に狩りの際に休息したとも伝えられています。

維新後は、賢之輔（天保 11 年～大正 5 年）、貞次郎（安政 5 年～昭和 8 年）、亥之輔（明治 32 年～平成 8 年）と当主が引き継がれました。明治 5 年に区戸長制が実施されると中村賢之輔が第二区（越ヶ谷・増林・蒲生など 28 町村）の副区長に就き、さらに明治 17 年・18 年には南埼玉郡を代表して埼玉県議会議員を務めた地方の名望家でした。この賢之輔の代に長屋門・土蔵・納屋が整備され、次の貞次郎の代に主屋が再築されました

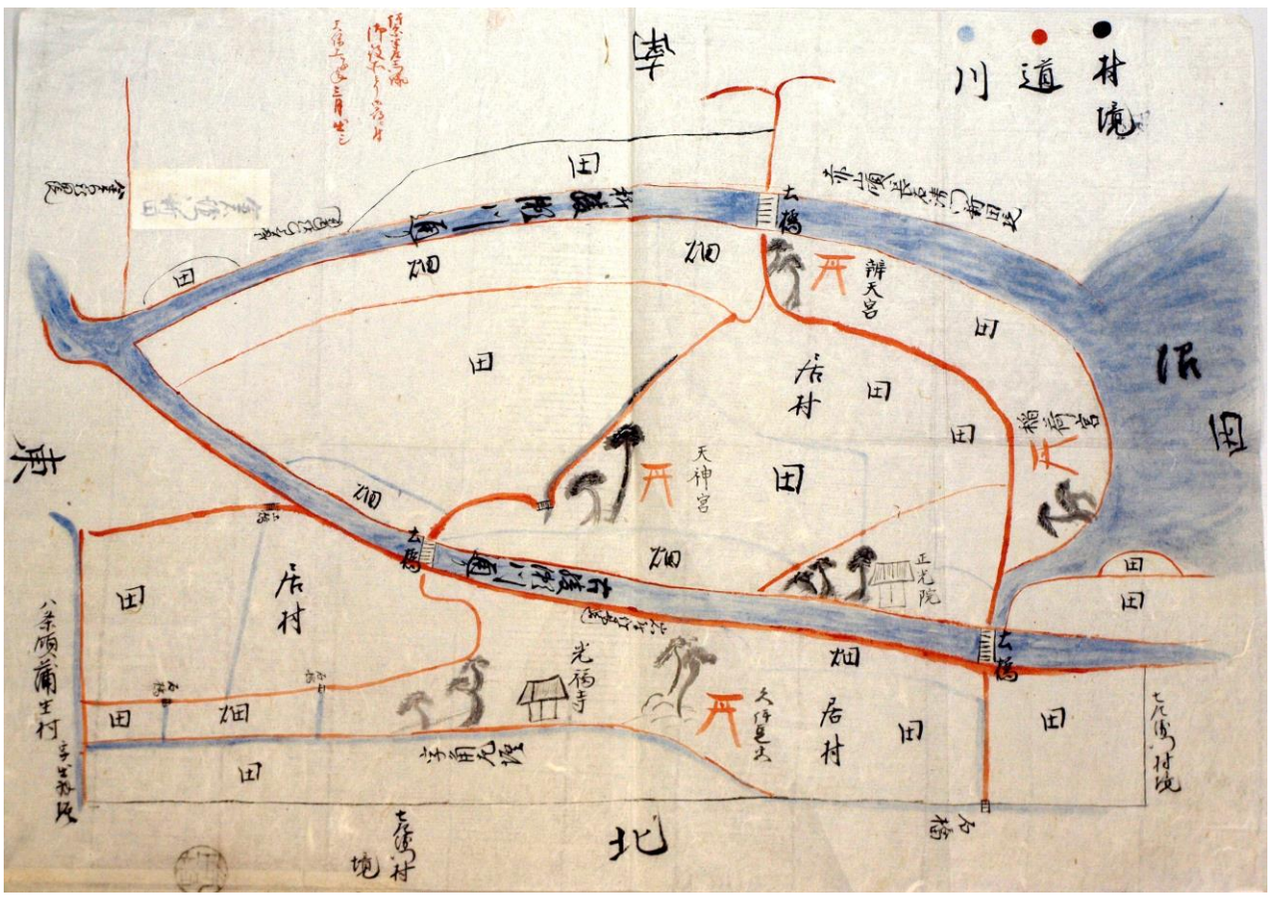
● かつての大間野村 ●

旧中村家住宅の所在する埼玉県越谷市大間野町は、綾瀬川を挟み草加市と接している。綾瀬川左岸の自然堤防上に位置し、標高 2.5 mです。大間野町周辺は江戸時代の寛永年間（1624～44）に新田開発がなされ、元禄 8 年（1695）の検地によって槐戸新田（さいかちどしんでん）より分村し、大間野村として村立てされました。村の鎮守は久伊豆神社で、他に稲荷社、天神社、弁天社が祀られていました。寺院は先述した光福寺のほか、浄土宗の正光院があり、ほかに焔魔堂が村内にありました。天保 9 年（1838）の家数は 65 軒でした。村内全体の耕地のうち 8 割は水田で、用水は末田村溜井を利用していました。明治初期には、米のほかレンコンが特産として記録されています。

明治 22 年（1889）からは旧大間野村・旧七左衛門村・旧腰巻村・旧神明下村・旧谷中村・旧四町野村の 6 か村が合併して出羽村となりました。村名は旧越ヶ谷郷の開発領主、会田出羽にちなんで付けられました。昭和 29 年には 8 町 2 村が合併して越谷町となり、昭和 33 年には大間野村や出羽村の名前はなくなりましたが、町名や地区名として現在でも残っています。

● 大間野村を流れる綾瀬川 ●

現在の越谷市内には古利根川・元荒川・綾瀬川などの河川が流れています。旧大間野村を流れる綾瀬川は、古代には荒川の主流であったとみられ、武蔵国足立郡と埼玉郡の境界になっていました。江戸時代の寛永 6 年（1629）に荒川が熊谷付近で入間川筋に付け替えられ、綾瀬川の水量は激減しました。一方で、流路は安定し、沼沢地であった場所も水田に開発されました。極端に蛇行していた河道は寛永年間以降、幾度となく改修されて現在に至っています。中村家に所蔵されていた天保 11 年（1840）の村絵図（下図）には、新旧二筋の綾瀬川の流れが描かれています。



（中村家に所蔵されていた天保 11 年［1840］の大間野村絵図）

● 主屋 ●

式台付き玄関（左下の写真）や書院造りの奥座敷を持ち、江戸時代の旧名主宅の格式を持った建物で、木造平屋建て、屋根は寄棟造、桟瓦葺です。大黒柱は１尺１寸６分（約 35 ㎝）のケヤキの一木です。込栓や継手などの工法を用いて造られ、釘は使っていません。

● 長屋門 ●

寄棟造、桟瓦葺で正面は 17．71m、側面は 4.54m です。中央の大扉はケヤキの一枚板で、その脇に潜り戸が入口として設けられ、門番が居た板敷の間から屋敷への出入りが確認できる構造になっています。外壁は、鼠漆喰（ねずみしっくい）と呼ばれる灰色の漆喰です。これは松を焼いてできる煤からつくられる松煙墨（しょうえんぼく）を加えて灰色に仕上げています。長屋門は江戸時代の武士や村役人の屋敷にみられ、越谷市内の旧名主宅でもかつて多く見ることができました。

● 石蔵 ●

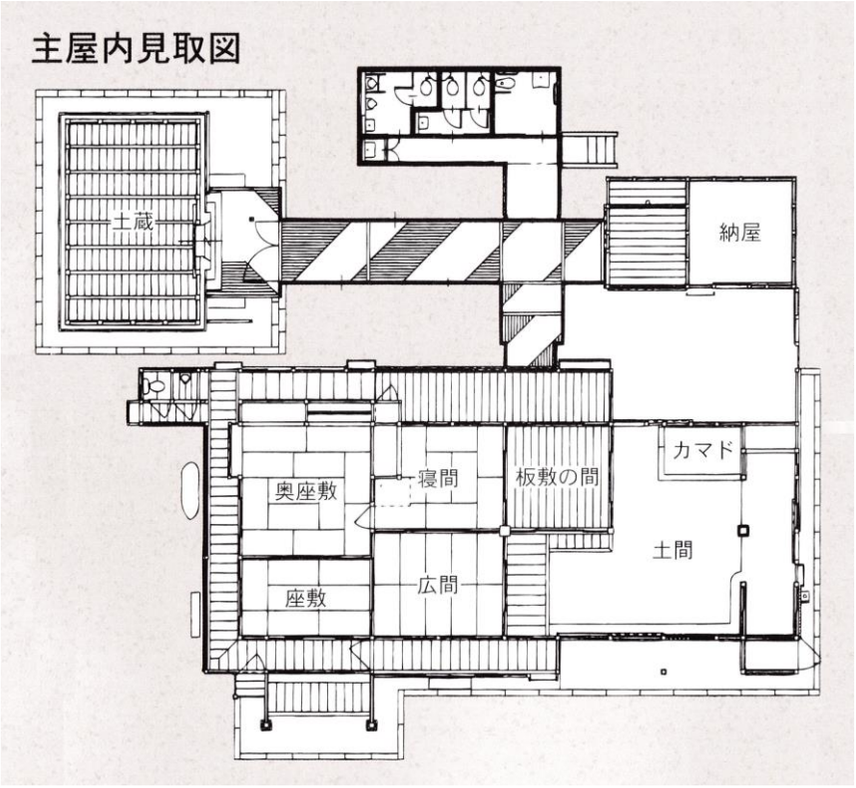
「東の蔵」と呼ばれ、米蔵として利用されていた。材料の石は、千葉県鋸山周辺で採取される房州石です。内部の壁面に取り付けられている木製の角材は米俵が壁面に接しないようするもので、秋には屋根まで届くほどの米俵が積み上げられていました。

● 土蔵 ●

白漆喰の外壁に黒漆喰の両開き扉を持つ土蔵は、二階建てで、一階には長持ち・お膳などの生活道具、二階には書籍・古文書などが保管されていました。二階に上がる階段には箱階段が用いられ、一階は高床で 1.2mの通気用の空間があります

● 広間・寝間・板敷の間 ●

この三つの部屋は、家族が生活する場所です。広間はもともと中座敷とも呼ばれ、10 畳の広さがあります。鴨居は 40 ㎝をこえるケヤキの一枚板を使用しています。寝間は 10 畳の広さで、主屋内で唯一、押入れがあります。板敷きの間は、茶の間とも呼ばれ、家族が食事をした部屋で、長屋門からの出入りが見通せるようになっています。



(越谷市教育委員会の作成したパンフレットより引用)

● 座敷・奥座敷 ●

座敷と奥座敷は、式台付き玄関から入り、幕府や大名の役人などの来訪の際に利用される正式な部屋です。座敷は 7 畳半の広さで、奥座敷の控えの間として利用されていました。奥座敷は 12 畳の広さで、正面には「床の間」縁側との間に出窓風に設けられた「出書院」、床の間の脇には「違い棚」が設けられています。

● 納屋（味噌部屋・道具部屋）●

納屋は 2 部屋あり、味噌部屋は味噌蔵とも呼ばれ、味噌の発酵、醤油や酒の保管などに利用されていました。内部から屋根裏を見上げると瓦の下地に杉皮がみられます。道具部屋は女中部屋とも呼ばれ、日常使用する食器類が押し入れに収納されていました。かつては渡り廊下で主屋や土蔵と行き来することができました。

２　生活の道具

● 竈（かまど）●

竈は食事を支える重要な調理設備であった。穀物や食料品などを加熱調理する際に用いられ、1950 年代頃までは国内の多くの家庭で使用されていた。

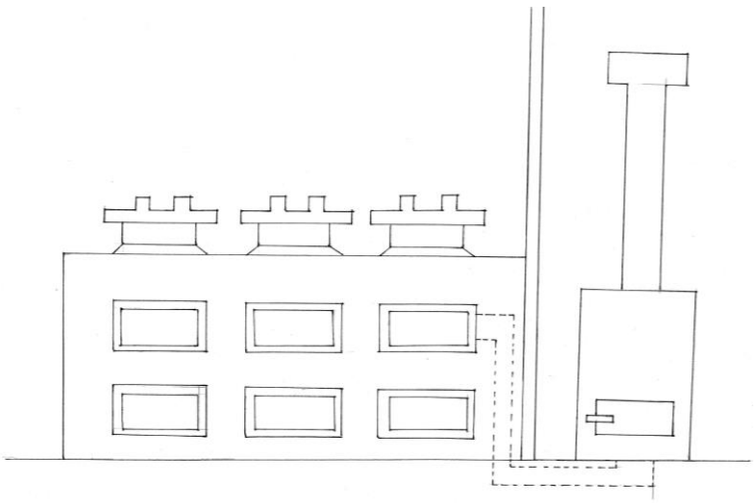
■中村家の竈の特徴

中村家の竈は 4 口構成となっている。写真左が大竈である。釜の直径は60 ㎝、深さは 47 ㎝となっている。右側に 3 つ並ぶ釜の直径が 30 ㎝、深さ 24 ㎝となっていることと比べるとその大きさがうかがえる。3 つの釜の奥には茶釜も置くことができる。

下部には焚口と灰取り口がある。焚口には薪を入れる。そこで燃焼して灰になったものが灰取り口に落ち、回収できるようになっている。

■ 竈（かまど）の排煙

中村家のかまどは、焚口と灰取り口のみが設けられた構造となり、薪の燃焼で生じた煙は焚口から煙道に排出され、地下を通って屋外に設けられた煙突から屋外に吐き出されるようになった。屋外に煙を排出させることは、平安期に一度普及した。庶民の住居が竪穴式から掘立柱建物に移行するにしたがい、煙道が失われた。竈は焚口と鍋釜をしかける穴のみが設けられた構造となり、薪の燃焼で生じた煙は焚口から屋内に排出され、屋根裏を通って屋根に設けられた「煙出し」の穴から屋外に吐き出されるようになった。高温多湿な気候の日本において家屋を腐朽やシロアリから守るため、かまどから屋内に煙を吐き出させ、屋根材や家屋を燻製にし、防腐効果を狙う必要があったためである。煙突が日本の竈に復活したのは、西洋文明が大規模に渡来した明治時代以降になってからだった。



■ぬかかまど
（写真 1）→

■七輪
←（写真 2）

■ガスコンロ
（写真 3）→

● 加熱器具の変遷 ●

加熱器具も知恵と科学の発展により形を変えてきた。写真 1 は「ぬかかまど」という。昭和 20～30 年代に使用された。一般的な竈は住宅の一部となっており移動が困難である。それに対しぬかかまどは移動が可能である。写真 2 は「七輪」で、昭和 40 年代まで一般的に広く普及していた。主に焼く用途で使用された。写真 3 は「ガスコンロ」で、昭和 30 年代頃から現在も使用されている。

● 調理道具 ●

昔から知恵や工夫をこらした様々な調理道具が造られ使われていた。その中からいくつかの道具を以下で説明する。

■皮むき器

野菜等の皮をむくために用いられた。全長 39cm で、柄の部分がやや長い。刃の部分は鉄製で、使用方法は現代のピーラーと変わらない。

■木製おろし器

木製のすりおろし器。二又になっている木の、枝に、凹凸のある棒を固定している。

■すいのう

食品をすくって水を切ったり、だしをこしたりするための、卵形の網に長い柄の付いた道具。ゆでた麺類をすくって湯切りするのに用いることもある。

■あられ炒り器

あられを炒るための道具。籠のような形をしており、あられが飛び出さないよう工夫されている。

■枡（斗・升・合）

枡は一般に体積を測るための測量器具である。1 斗＝10 升＝100 合という関係になっている。現在でもこの単位は、米などの量を測るために用いられている。（写真奥が一斗枡、手前右が一升枡、手前左が一合枡）

● 食卓の移り変わり ●

今から 1200 年ほど前の奈良時代、食器の下には折敷と呼ばれる足のない膳を使っていた。この折敷に料理を並べて使っていたが、庶民はムシロやゴザで作ったランチョンマットに似たものを使っていた。そこから、時代を重ねるにつれ、折敷に足をつけた脚打ち折敷が生まれ、それが膳の原形となった。
庶民の場合は近世に入っても膳を使うのは何か特別の時だけであり、一般に用いられていたのは箱膳である。箱や引き出しの中に個人所有の器や箸をしまうようになっていて、食事の時にふたを返して器を並べる。もともとは、禅院で使われていたものが、手軽さがうけて農家や商家や工人の家で広く使われるようになった。ちゃぶ台という円形や長方形の足つきの低い食卓が普及するのは明治時代中頃からである。

■折敷　（写真右）

食器を載せる食台の一種で、四角でその周囲に低い縁をつけたもの。その名は、上古に木の葉を折敷いて杯盤にしていたことが残ったものであるといわれる。平人の食事に供されたもので、8 寸(約 24cm) 四方のものを「大角」または「八寸」、5 寸(約 15cm) 四方のものを「中角」、3 寸(約 9cm) 四方のものを「小角」といい、角を切らないものを「平折敷」，四隅の角を切ったものを「角の折敷」あるいは「角」と呼び、ほかに足がつけられた「高折敷」「足付折敷」などの種類もみられた。

■箱膳　（写真左）

箱膳は、家族の一人一人が自分の箱膳で食器を管理し、食事の際に、箱から出して使った。箱膳を使う食事のようすは、今とはだいぶ異なっており、食事の時間になると皆が集まってきて食べ始め、食べ終わると食器に湯を注ぎ飲み干し、お漬物で拭いて、銘々が箱膳の中に食器を伏せて収納するというものである。箱膳からちゃぶ台を囲む食事のスタイルに変わったのは、衛生面に気を使うようになったことや、大家族から小さな家族に変化していったことなど、様々な要因が考えられる。

■ちゃぶ台　（写真右）

四本脚の食事用座卓。ふつう方形または円形で、脚は折畳式のものが多い。卓袱台と書くように，卓袱（しつぽく）料理の食卓を日常生活に導入したもので、「チャブ」とは卓袱の原義であるテーブルクロスの意の中国音（zhuō fú）からきたものという。
伝統的に銘々膳方式の食事をしていた日本人にとって、数人で一つの卓を囲み料理をとり分ける卓袱の食事形式は特異で衝撃的なものであった。やがてその利点を認識する階層も広くなり、日常的に身分による区別を必要としない家庭生活の中で一般化するようになった。

● ハレの日の食器 ●

ハレとは、お正月・ひなまつりといった年中行事、七五三・冠婚葬祭といった人生儀礼などおめでたい行事のことであり、ケとは、普段の仕事や生活のことである。食事に使用する食器の上でも、二つの違いがはっきりとしている。

■漆器（写真左：ハレの日、写真右：ケの日）

正式な食事において、日本料理はすべて並べておいてから食するスタイルである。料理が冷めない工夫として木製漆塗りがされ、蓋付きが適している。中世には食器の中心的素材は木であったが、現代では家庭で使用される食器は汁椀、茶托、盆の少数を除いてほとんどが陶磁器で占められている。

■重箱 ↑

ハレの日の料理を入れる箱である。今日では、主に正月のおせち料理の容器として使われる。

■盃（磁器）

磁器製猪口は宴会などに用いられるようになる。

■酒瓶（徳利）→

首が細くなった酒を入れるための容器。

● さまざまな生活道具 1 ●

■めんぱ

木製の曲げものの弁当箱。ヒノキやスギの薄板で造り、曲げわっぱと呼ぶ地域もある。

■アルミニウム弁当箱

大正時代に開発され、手入れのしやすさから、人気が出た弁当箱。その後、アルミニウムをアルマイト加工した弁当箱が開発されて広く普及した。

■飯びつ

炊きあがった飯を移し入れておく木製のうつわ。御櫃(おひつ)、御鉢(おはち)ともいう。

■牛乳缶 →

昔は、乳牛から搾乳した牛乳をこの缶で輸送していた.

■茶釜・薄茶器・茶筅

茶釜は湯を沸かす鋳鉄製の道具のことで、薄茶器とは薄器とも呼ばれ、薄茶を入れる容器の総称。茶筅は、茶碗に抹茶と湯を入れ、それを攪るために用いる竹製の道具。

■銚子

銚子は、茶事にだされる食事(懐石)に用いる道具で、酒を入れて杯につぐための、注ぎ口と持ち手のある蓋付の器のことで、酒次（さけつぎ）ともいう。

←■火鉢

江戸から明治･大正時代まで使われた暖房器具。灰を入れ炭火をもやして暖をとる。木製・金属製・陶製などがある。簡単な調理もできるよう工夫されていた。

■長持 ↑

家の娘が結婚して嫁ぐ際に持参する荷物入れ。また嫁入りの際に必要な道具を入れる箱。移動しやすいように底部に車輪をつけている。また、嫁入りで長持を運ぶ際の祝い歌は「長持歌」として伝承された。明治・大正時代以降になると、長持の役割はたんすに替わられた。

■わらじ編み↑

前方にある 3 本の木に藁を引っかけて編んでいく。居間の囲炉裏の近くで行っていた作業が、どこの部屋でもできるようにこうした道具が作られた。

■薬箱→

チェックリストがあり、豊富にそろっていたことがわかる。

←■網代笠

組み笠の一種。経木(きょうぎ)を網代に組んでつくる笠で、平組みと綾組みの 2 種がある。古く大和国の大峰の修験者がもっぱら着装したので、ギョウジャガサ、キセンガサとも呼ばれた。形は円錐形で、現在は、軽快な日よけ笠、雨よけ笠として、主に農山村で男子が着用している。タケの網代笠は半球形につくられ、これも古くから僧尼に用いられていた。

● さまざまな生活道具 2 ●

■行火（番屋炬燵）

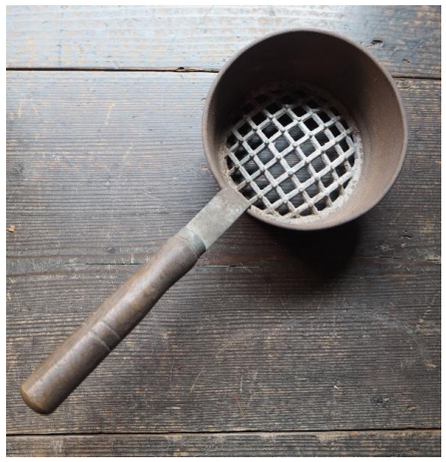
行火は一人用で、持ち動かせる暖房器具の一つ。布団などに入れ手足に当てて暖をとる。地域や世代によっては「こたつ」と呼ばれることもある。熱源は木炭・炭団・豆炭が用いられた。

■湯たんぽ

日本には室町時代に入ったとされ、古くは陶器製が主で、金属製のものが現れたのは大正期以降。戦時中は金属が貴重となったため、陶器製のものが使われるようになる。陶器製の湯たんぽは、保温性が良く遠赤効果もある。

■炭火おこし →

中に炭を入れて、そのまま火をかけることができる。取手がついているため、そのまま持ち運び



■台十能 ↑

炭火を入れたまま床に置くことができる台付きの十能。炭火を運ぶものは、金属製の鍋型容器に木製の柄がつき火をかきおこすためにはスコップ型の道具を使い、両者を合わせて十能という。江戸時代初めに考案。

■火のし（左）・炭火アイロン（右）

中国から江戸時代中頃に金属製の片手鍋のような容器に熾き火にした炭を入れ、この熱と容器の重みで布のしわをのばす火のしが伝えられ、炭火アイロンは明治時代に普及した。どちらとも電気式アイロンが普及する昭和 30 年代頃まで使われていた。

■扇風機

大正時代末期につくられた扇風機。この時代から本格的に国産扇風機が量産され始めた。後に上下高さが変えられるものや、首が左右に動くものが開発された。

■台はかり

明治～昭和中期まで使われていた、重さをはかる道具。物を皿にのせ、おもりを左右に動かしてつりあわせる。おもりがある場所の目盛りで重量が具体的にわかる。大きくて重量のある物をはかる時は、人がのれるような大きさの台はかりを使用する。

■蓄音機

木製の蓄音機。円盤レコードの溝に針を接触させ、録音した音を再生する装置。

■レコード盤入れ

銅製で持ち運びができ開閉式である。
コンパクトでありながら 30 枚以上収納できる。

■ラジオ　戦前は、大きなスピーカーがついた「ラッパ付きエリミネーターラジオ」が一般的であり、ラジオが普及した時期であった。戦後はカーラジオも増え、それに使用できるよう電圧が上げられた高機能なラジオが登場した。

● 女中部屋の道具 ●

■洗濯板

木製の洗濯板。部分洗いに優れ、頑固な汚れを落とすことができる。
（※洗濯板を使って実際の体験ができます）

■衣服用竹行李（着物用）

衣服を収納できるよう、大きく、縁が補強されている。通気性がよい。

■裁縫箱（写真上左：開いた状態・上右：閉じた状態）

木製の裁縫箱。背面に定規を入れるスペースがあり、それぞれ収納場所が分かれている。後ろに刺さっている。
竹ものさしは、くじら尺で１尺＝37.9cm である。

■からくり箪笥

内部には収納スペースが数段に分かれてある。鍵による開閉が可能な珍しい箪笥

■柱時計

ゼンマイの時計。昔の家庭で一般的であった時計。

■杵・臼

脱穀・精白・餅つきなどに用いる。木製が一般的であるが、石製もある。つくだけでなく、磨り潰す道具としても使われた。

■水桶　↑

水を入れるための木製の桶。飲料水や風呂水を運搬する時には、古くは水桶を用い、両端に吊し鈎のついた天秤棒に吊り下げて運んだ。

■石臼↑

石で作った臼。ものを磨り潰すための道具。上臼と下臼が対をなし上臼が回転して磨り潰す。

（※石臼は実際に体験ができます）

←■陶器の酒樽・酒徳利

木製の樽から陶器に変化したことで、繰り返し使えるようになった。「大徳利」は「通い徳利」「貸し徳利」などと呼ばれ、量り売りや酒質見本の運搬などに使われ、地名や酒屋の銘が書かれている。

３　農具　～季節ごとの農作業(稲作)～

春　米作りのはじまりから種ふりまで

米づくりの基本は田の整備からはじまる。春では、主に田うないから種ふりまでの工程と利用する農具。

● 田起こし（田うない）● ３月中旬から４月中旬

田起こしとは、稲を植える前の乾いた田の土を掘り起こし、細かく砕く作業。田うないとも呼ばれる。人力によるものと畜力のものがある。人力には、万能と呼ばれる農具が利用される。これは、畜力による田起こしが難しい湿田の深田などで利用された。　（使用する農具：万能・平鍬）

■万能

2 ～ 6 本の刃を持つ股鍬。弥生時代、すでに木製の股鍬があり、古墳時代には鉄製のものもある。関東地方では、1804 年～1830 年に普及し、万能と呼ばれていた。主に粘土質土壌の耕起用として各地に普及した。

● 田のくろつけ ●

田んぼと田んぼの間に土を盛り上げ、境にしたものがクロ（畔）である。クロは水の確保（保水）や田作業の小道としても利用されてきた。クロつけの方法は地域によって異なるが、田んぼに水を入れて田うないが終わってから行う地域が多い。埼玉県の低地では、鍬で前年のクロの土を取ってから新しい土を付けて修復する。こうしておくと代掻きが行いやすくなる

←■鍬

田畑の耕起、畔塗り、畝立てなど収穫まで利用される。土地の地形や土壌に合わせた種々の鍬が作られている。

■ふみ鍬・てすき →

今日のスコップの用途で足で土の中に踏み込み、耕起する農具。

● 代掻き（しろかき） ●

しろかきとは、水の入った田の土をかき混ぜ土の塊を細かく砕き、均一にならす作業。しろかきは通常、田に水を十分入れ、3 回行うのが普通である。田面に散布した肥料を混和するとともに、表面の土を柔らかくして田面を平らにし、また水田の漏水を抑える効果がある。牛馬を使う場合は、マンガ（馬鍬）を引かせ行う。人力の場合は、万能や平鍬を利用した。（使用する農具：馬鍬、平鍬、万能）

■馬鍬（マンガ）

水田で、牛馬に引かせて、田植え前の水の張った田の土を細かく砕き平らに均す代掻きに使う。この写真のものに、牛馬に引かせるための綱をかけることで効率よく代掻きができるようになる。

● その他 春に使われる農具 ●

■踏鍬（ふみぐわ）

長い柄を体の中央にして突き押すかたちに持ち、足を掛けて踏み込む。鍬の一種。主に関東地方では、麦畑などの畑作の耕起のほか、畝作り、稲作でも利用された。大型ものが多く、中村家のものは柄の部分だけで 178cm あり、主に男性が用いた道具である。

■田舟（たぶね）

湿田で、土入れの土、田植えの苗、刈り取った稲を入れて運ぶような舟。一年中稲作の中で用いられる。乾田化が進められる近代以前は、各地で利用されていた。

夏　田植えから田の整備まで

夏の初めに田植えをするところから、田の整備主に草刈りについての道具。

● 田植え ●

苗代で育った苗を取る。苗取り台に腰かけて行われる。苗代から本田に苗を運ぶことを苗運びという。苗運びの際に下記の苗籠を使用し苗を本田に運ぶ。日本の稲作は、苗代で育てた苗を本田に植える移植栽培と、直接本田に種籾を蒔く直蒔きの二つの栽培法が古くから行われてきた。埼玉県ではこの二つの栽培方法が採用されていた。直接種籾を本田に蒔く栽培法は、県内では摘田と呼ばれ、特に大宮台地周辺に集中している。日本列島が梅雨入りすると田植えが一斉に開始される。この時期の雨は、稲作にとっては恵みの雨である。埼玉県では田植えの最盛期が 6 月 10 日頃からになる。

■苗籠（なえかご）

苗代で育てた稲の苗を取り入れて、田植えする水田に運ぶ籠。二つ一組で一荷とし、天秤棒の前後に吊下げて担ぐ。
(※苗籠は体験ができます)

● 水揚げ ●

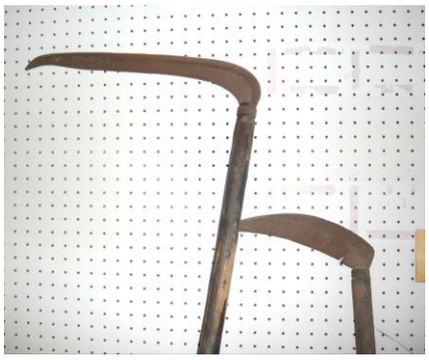
田植え後、用水路などから水を田にいれる。越谷市西部では、末田用水（さいたま市岩槻区末田の末田須賀堰で元荒川から取水、大間野町内で綾瀬川と合流）、東部では葛西用水から用水を引いて、水揚げを行った。

■揚水車（ようすいしゃ）

水田に灌漑水を入れるために用いる水車。水路より高いところにある場合には、水を汲み上げて田に入れなければならない。そのために、縄をつけた振釣瓶などと呼ばれる桶で汲み取った水を放り投げるように田にいれるなど、さまざまな方法がとられていた。踏車・水車とも呼ばれた。

● 田の草取り ●

7 月～8 月の間に 3 回ほど草刈りを行う。草刈りは田のまわりの畦を中心に刈っていく。草刈りは、田の畦草の中には稲穂を食べる虫などもいるため、住処となる草を刈り、虫を田から遠ざけるために行う。



■草刈り鎌

刃の部分は内側についており、柄の部分は木でできている。草の種類や使う場所によって様々な長さの物があり、この鎌は背の低い草を刈るために用いられた。

■田こすり

田の草取りに使用される道具。柄を持ち冊間を押し引きして草を取る。草を引っかくように使用し、水面に草を浮かばせて最後にその草をかき集めて除草する。

■田打車（たうちぐるま）

除草道具のひとつ。一日に 8 反歩もの草取りができるという意味でハッタンドリとも呼ばれる。立ったまま除草作業が行える便利な道具で、様々な工夫が凝らされた多様な形態の田打車が各地で使われた。

■草摘み籠

田畑の刈り取った草を入れる籠。

秋

秋の仕事　～収穫から選別まで～

稲を刈り収穫してから脱穀、天日乾燥、籾摺り、玄米とくず米などに分ける選別までの作業を行う。

● 稲刈り ●

稲刈りは、熟した稲を収穫するために切り取る農作業である。穂が出てから約 40～45 日、黄金色の稲穂が垂れ下がると稲刈りが行われる。早く刈りすぎると米が充実する前で収量が少なく、遅れると収量は増えるが、籾が熟れすぎて米の色つやが悪くなる。稲刈りはタイミングが大切である。

■稲刈り鎌

稲などの穀物の刈り取りに用いられる刃物。地金の裏に刃金を接合した片刃となっている。稲を片手で持ち、根元に刃をあて、引くようにして刈り取りを行う。

● 乾燥～稲運び～ ●

束ねた稲は稲架（はざ）に掛けて 2 週間程度、天日（太陽光線）と風によって自然乾燥させる。乾田の場合は田んぼの中に稲架をつくり、湿田で田んぼや畦に稲架を作れない土地では、家の周囲に作って乾燥させた。稲架に稲をかけると、米がふくらんで質が良くなると、昔から言い伝えられている。乾燥が完了すると、脱穀する場所まで稲を運ぶ。この稲運びのことを「稲揚げ」という。荷車や一輪車を使い、素早く籾を落とさないように運ばなければならない。

● 稲扱き ●

乾燥させた稲の穂先から籾をこいて落とす作業。効率よく、かつ丁寧な作業ができるよう脱穀の道具は様々な工夫がこらされてきた。

■千歯こき

稲の脱穀用具。通称はコキという。歯が鉄製のものと竹製のものがある。鉄製のものは江戸時代の元禄期頃から普及したといわれる。それから明治時代に至るまで、長い間使われてきた。稲の束の穂の部分を広げるようにして、穂束が千歯こきの歯全体に当たるように掛け、手前に引っ張ると、他ら籾が粒になって落ちる。

■足踏脱穀機

刈り取って乾燥させた稲穂から籾を扱き落とすのに用いた足踏み式の回転式の脱穀機。大正時代に入ってこれが登場するが、長く千歯こきになれていた人たちは千歯こきの方が仕事が早いといって、足踏脱穀機をすぐには導入しなかった。円筒形の同を横にして逆Ｖ字形の銅線や鉄線の歯を千鳥掛状に交互にずらして植え並べ、胴部に連結させた踏板を足で踏んで回転させ、そこに束ねた稲穂をあてて扱く。

■唐竿（クルリ棒）

木や竹の先に取り付けた棒や板を回転させて、稲を打って脱穀する。千歯こきで脱穀しきれなかったものを脱穀する。

● 選別 ●

〔 脱穀した籾には、稲の葉や藁くずが混ざっている。これを様々な方法で取り除く 〕

←■箕

中に選別する穀物を入れ、両手で持って上下にあおるように動かすと風が起き、それによって軽いゴミや藁くずは箕の外に飛び出したり、前方によったりし、重い実が後方にたまる。時折、箕の床を張るように、力を加えて前方に集まった藁くずなどを口の先から外にはじき出す。脱穀した穀物を選別するだけでなく、近距離での運搬にも用いた。

■唐箕→

人力で起こす風力を利用して選別を行う道具。江戸時代に中国から伝わったものとされ、それまで行っていた箕による作業よりはるかに能率が高く、広く各地に広がっていった。胴体に組み込んだ四枚羽の扇板を連動するハンドルで回転させて風を起こし、前方上部に載せた漏斗から脱穀した穀物を適量ずつ落下させ、風力によって選別する。

● 籾干し ●［天日乾燥作業］

（籾を庭のムシロ（藁やイグサなどの草で編んだ簡素な敷物）に広げて乾燥させる。ムシロに籾を広げる作業や、夕方納屋に取り込む作業は子どもたちにも手伝わせていた。）

■干しひろげ棒 →

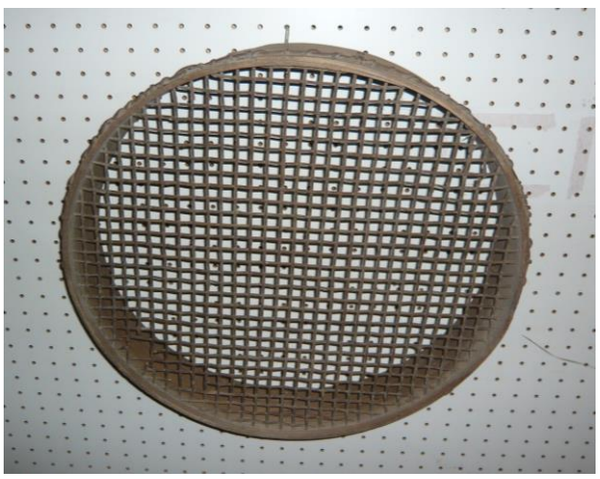
籾を庭に干すとき、これで返しながら干すのに使用した道具。

● 籾摺り ●

（籾摺りは籾からもみ殻を除去して玄米にする作業。弥生時代には竪臼に籾を入れて竪杵でついていた。その後、木摺臼や土臼が使われるようになった。）

● 選別 ●

（籾摺りをした後、玄米と混ざったくず米をわける作業を行う。）



■通

目をあけて編んだ底面をもつ浅い籠で、選別するものを中に入れて、揺すりながら選り分ける。用途によって目の大きさの異なる通を使い分けていた。目の大きいものを通、小さいものを篩と区別するが、一般的には混同されることが多い。

■万石通し

おもに玄米中のくず米、精米中の砕米や糠を除去するのに用いた。単に万石あるいは万石卸ともいい、やや小型の千石通、千石卸もあった。傾斜した金網の上へ米を滑らせ、金網の目を潜らせることによって粒を選別する道具。その構造は、金網をはめる傾斜台とそれを支える脚、米を入れる漏斗からなり、漏斗へ米を入れると、それが金網の上を滑り落ちる。

● 俵詰め ●

〔俵（藁を円柱形に編んで作られた袋。おもに農閑期に作っていた）に玄米をいれ、縄をかける作業。〕

■漏斗

下の口が小さく、上の口が朝顔状に大きく開いたもので、穀類を俵や袋に入れるための道具。
少量の穀類や酒、油などの液体を、壺や徳利あるいはビンなどに移しいれるのに使うものもあった。

■枡

米などの穀物の量を量る計量容器。おもに尺貫法の単位である「合」「升」「斗」を図るために利用される。米を漏斗から俵に入れる作業をするとき、漏斗の口に米を流すときにも使われていた。

■竿秤

重量を計るメモリをつけた竿。米の重さを計ることにも使用していた。竿につけた取手の紐を支点とし、先端に計量するものを、他の側に錘の分銅をつりさげ、鐘を移動させて水平を保つ位置のメモリを読む。

● その他の農具 ●

（年中使われている作業を効率よく行うための農具。）

■肥担桶（こえたご）

し尿を田畑に施肥するために運ぶ桶で肥桶ともいう。側板の対角の二枚を角状に高くし、縄に結び結びつけて、天秤棒で前後に吊り下げ、一荷で運ぶのが一般的である。
液状のし尿が揺れで飛び跳ねないよう、中に板を浮かせたり、横棒の一方を桶の縁から飛び出るようにして簡単に取り外しできるような蓋をするなどの工夫をしたものもある。

■斗桶（とおけ）

主に米などの穀物を計量する一斗（約 18 ℓ）用の円筒形の枡。正規の枡として検定されたもの以外にも、おおよその目安で一斗入れすることも多く、円形だけでなく、楕円形もある。計量に使われるだけでなく、脱穀作業で選別する唐箕の注ぎ口に穀粒を落とし込んだり、籾を筵に広げて乾燥するときなど、おおよその量をはかりながらの作業でも使われた。

■岡持

食べ物や食器を入れて持ち運ぶ容器。蓋つき浅い器の両側に二本の長柄をのばし、取っ手を渡したもの。田植えや稲刈りのとき、大勢の食事や食器を野良まで運んだりするのに用いる。

■大八車

江戸時代以降盛んに使用されるようになった人力によって荷物や米俵を運搬する二輪車。羽根 7 枚と矢による車輪と簀子張りの車台で出来ている。1～2 人で引き、後押しに 2 人程ついた。江戸時代の明暦大火後の復興整備に、重量のあるものを運ぶため大いに活躍した。全国的に普及するのは、農村部に入る明治期になってからといわれ、昭和初期まで各地で荷物輸送に使われた。

● 農閑期に利用される道具 ●

稲作は収穫を終えると冬は閑散期となる。収穫がない閑散期は漁業や藁を編んで生産を行っていた。そこでも様々に工夫がなされている道具が使われた。

■菰編台（こもあみだい）

左右の脚と上部に渡す桁、軽糸を巻き付ける菰槌からなる。脚には二股の枝木を二つに割ったものが多く、上部にあけた柄穴に桁を差し込んで組み立てる。桁には経糸となる細縄を掛ける目盛が刻んである。米俵や炭俵、簀子、脛巾編みなどに使われた。

←■筌（うけ）

河川・用水路・沿海の水中に沈め、魚類・カニ・エビなどの習性を利用して捕獲するための仕掛け。竹や枝などの細棒を縄などで編んで筒状にし、その一方を緊縛し他の一方に口を設け、そこから入った魚が脱出できないようにかえしなどがついている。

■生簀（いけす）↓

釣って捕まえた魚を一定期間生きたまま保管する

■蓑と笠（みのとかさ）　→

蓑は雨を防ぐための外衣の一種で、防雪、防寒、日よけ、運搬の際の背中当てなどにも用いられ利用範囲は広い。藁（わら）、菅（すげ）、茅（かや）などを材料に作られる、笠は日光・雨・雪などが当たらないように頭にかぶるもので、「かぶりがさ」ともいわれる。藺、菅などを材料に円錐形に作る。

4　信仰　～屋敷に祀られる神々～

● 神棚 ●

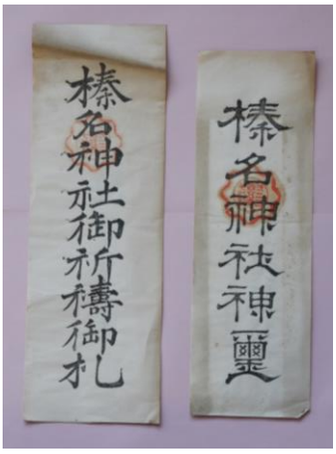
神棚は中央に神宮大麻、向かって右に氏神、向かって左にその他の信仰する神社の順に祀る。日本は遠い昔より農耕をはじめ、神々から様々な恩恵をもらっていた。その感謝の念をあらわすため、神社から戴いてきた御神符をより丁重におまつりするために神棚を設けるようになった。神棚を祀るということは、家に神様をお迎えするということである。そのため、神棚の設置場所は清潔な所で、家族が集まってお参りしやすいところに設置する。また、出来るだけ目線の高さより高い位置に設置する。

■神棚に祀る神々

氏神…同じ地域に住む住人たちによって共同で祀られる神。
神宮大麻…「伊勢神宮の御神札」のこと。「大麻」はお祓いの道具や御神札等を表す言葉である。
崇拝する神社…地縁的・血縁的な関係以外で個人の特別な信仰等により崇敬される神社.

● 神札からみた中村家に祀られる神々 ●

神棚には多くの神札が飾られており、崇拝する神社の数は 20 を超えるほどである。また、同じ神札が 10 枚以上ある神社もある。全国各地の神社や山に足を運び、熱心に信仰していたことがうかがえる。



■榛名神社神璽
・榛名神社御祈禱御札

群馬県高崎市の榛名神社の神札。祭神は火産霊神、埴山毘売神。多くの神々が祀られているため様々な御利益がある。主な御利益は五穀豊穣、商売繁盛、天下泰平など。

■榛名神社蟲除
・榛名神社嵐除

■大山阿夫利神社御璽

神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社の神札。祭神は大山祇・大雷神・高おかみ神。男性の仕事運をもたらす。

■武州高尾山御神札

東京都八王子の有喜寺の神札。祭神はカラス天狗。御利益は勝ち運・出世・災厄除け。

■國幣中社鹽竈神社符

宮城県塩竈市の鹽竈神社の神札。祭神は塩土老翁神・武甕槌神・経津主神。御利益は交通安全・航海安全。

■筑波山神社男大神御神札

茨城県つくば市の神社。祭神は筑波男大神・筑波女大神。御利益は縁結び・夫婦和合、子授け。

■厳島神社守護御神札

広島県市廿日市市にある厳島神社の神札。祭神は杵島姫命・田心姫命・湍津姫命。御利益は皇室の安泰、国家鎮護、海上の守護。

■江嶋神社御璽

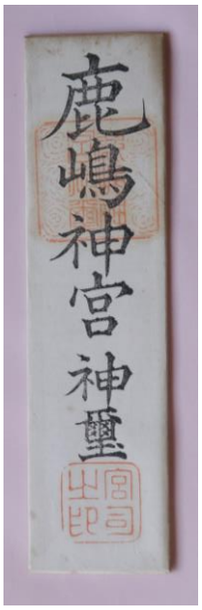
神奈川県藤沢市の神社。祭神は多紀理比売命・市寸島比売姫・田寸津比売命。御利益は芸道上達、商売繁盛、恋愛成就。

■武州総鎮守氷川神社御神札

埼玉県さいたま市大宮区の神社。祭神は須佐之男命・稲田姫命・大己貫命。御利益は商売繁盛・縁結び・安産祈願。

■冨士嶽浅間大神

静岡県富士宮市の神社。祭神は木花咲耶姫。御利益は家庭円満・安産・子安水徳。



■鹿島神宮神璽

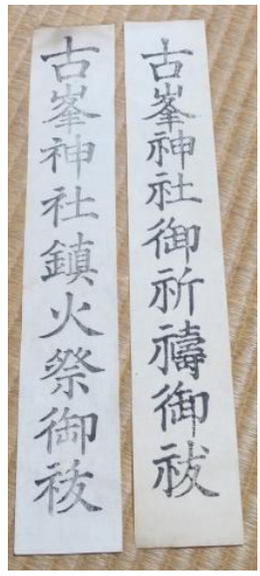
茨城県鹿嶋市の神社。祭神は武甕槌（たけみかづち）。御利益は武道上達・必勝祈願・心願成就・商売繁盛。

■香取大神宮札

千葉県香取市の神社。祭神は経津主（ふつぬし）神。御利益は家内安全・海上守護・心願成就・縁結び・安産・勝ち運・交通安全・災難除け。

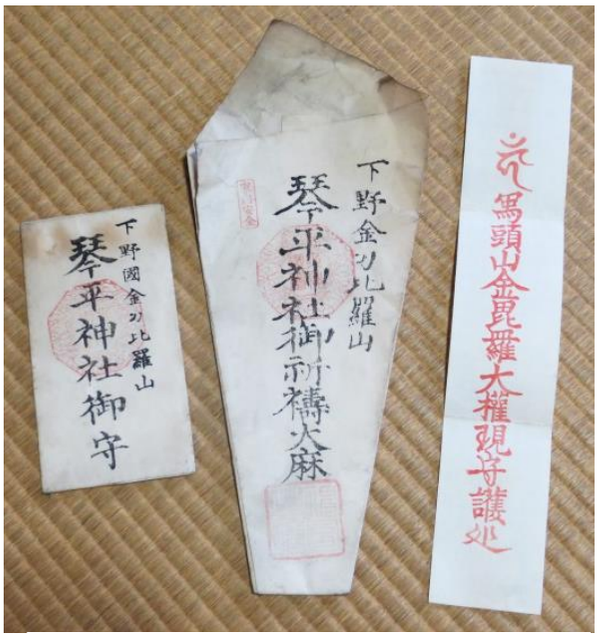
■熱田皇大神宮

愛知県名古屋市の神社。祭神は熱田大神・天照大神・日本武尊・素戔嗚尊（すさのおのみこと）・建稲種命（たけいなだねのみこと）・宮簀媛命（みやすひめのみこと）。御利益は家内安全・無病息災・開運招福。



■古峯神社鎮火祭御祓・古峯神社御祈祷御祓

栃木県鹿沼市の神社。祭神は日本武尊（やまとたける）。御利益は火難除け・海上安全・大漁満足・五穀豊穣・家内安全・商売繁盛・交通安全・当病平癒・身体健全・開運・除災・心願成就。

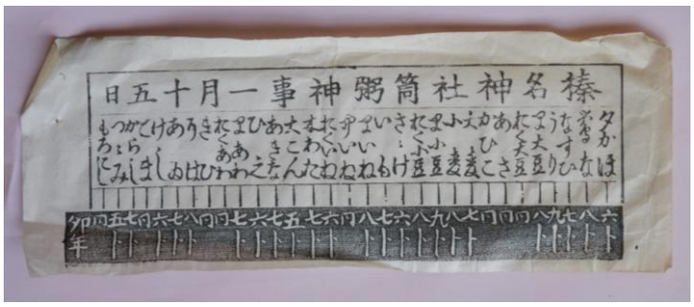


■下野金刀比羅山琴平神社御神札

栃木県栃木市の下野金刀比羅山琴平神社の神札。祭神は大物主（おおものぬし）神。御利益は農業殖産・漁業航海・医薬・技芸など。

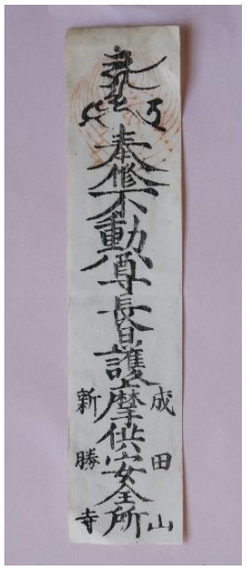
■三峯神社御神札

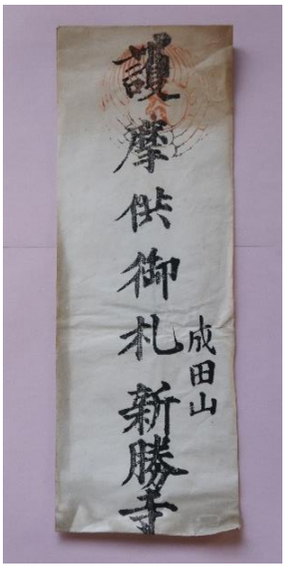
埼玉県秩父市の三峯神社の神札。祭神は伊弉諾（いざなぎ）・伊弉冉（いざなみ）。御利益は無事息災（火盗除け・病気除け・諸難除け）。



■榛名神社（はるなじんじゃ）　筒粥神事（つつがゆしんじ）

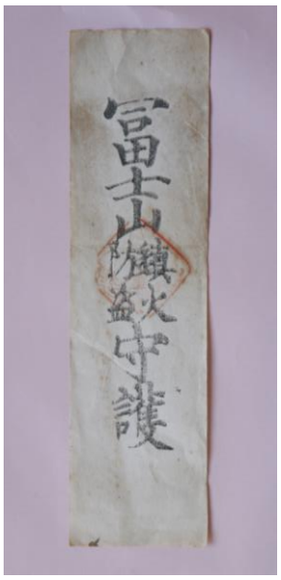
1 月 15 日の小正月に行う。竹などの筒を占う作物の数だけいれて粥を煮込み、筒の中の粥の量などで豊作を占う。榛名神社の筒粥神事は神職のみで行われている。



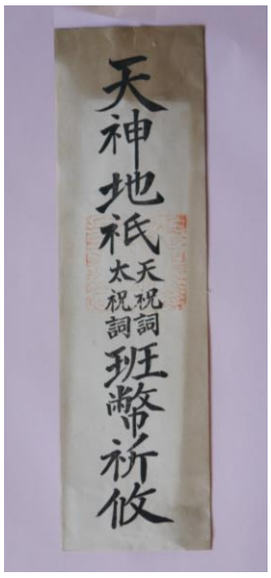


■護摩供御札新勝寺
・奉修不動尊長日護摩供安全所

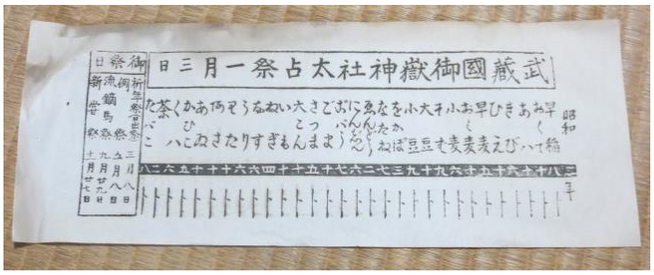
千葉県成田市の成田山新勝寺の御札。本尊には不動明王が祀られている。護摩祈禱によって人々の願いを叶える。



■富士山鎮火防盗守護

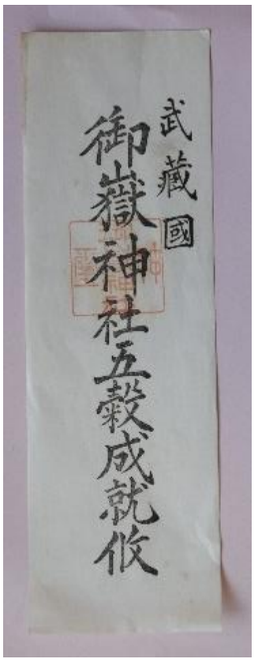


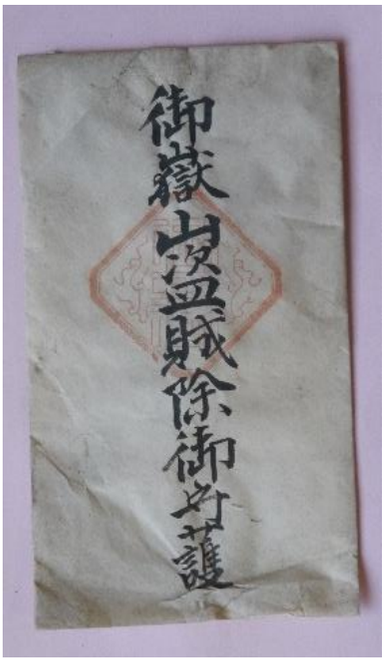
■天津地祇　天祝詞
太祝詞　班幣帛



■武蔵国御嶽神社（みたけ）　太占祭（ふとまにさい）

１月３日早朝に行う。鹿の肩甲骨を斎火で焙り、できた割れ目の位置でその年の農作物の出来、不出来を占うもの。現在も武蔵御嶽神社の太占祭場で行われている。





■武蔵御嶽神社神璽

東京都青梅市にある神社の神札。盗難除け・魔除けの神「大口真神」は江戸の昔から「おいぬ様」として親しまれ、広く信仰されていた。武蔵御嶽神社では御師ごとにさまざまな神札が頒布された。

● 扇子 ●

扇子は平安時代以降に中国から伝わった。仰ぐだけではなく祭り事や贈り物、能などの様々な方法で使われていた。扇子は「いつまでも末永くいろいろな運が広がっていきますように」という意味がこめられている。また、扇子は「扇子で風を送ることにより、邪気を払い、神を招く」という説もあり、祭礼や神輿の時に巨大なうちわを扇ぐのはそのため。恵比寿は商売繁盛・防災招福・五穀豊穣・大魚守護の御利益があるとされる。馬は神の遣いという意味がある。大黒天は商売繁盛・出世開運・五穀豊穣・子孫愛育の御利益があるとされる。

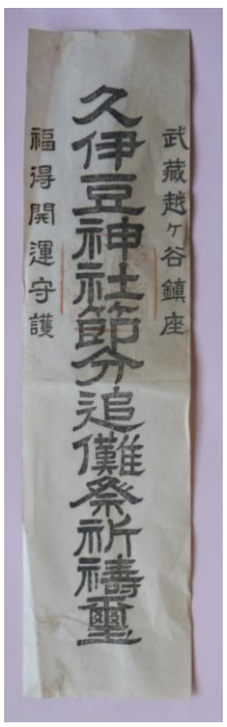
■恵比寿の絵の扇子

■黒い馬の絵の扇子

■大黒天の絵の扇子

● 氏神 ●

その地域の住人で、土地の氏神にお祀りする人々が氏子で、寄付や神社の運営をするなど神社に奉仕する役目がある。中村家の氏神は久伊豆神社（現三社大神社）であり、中村家はその氏子である



■久伊豆神社節分追儺祭祈禱璽　（写真左）

祭神は大国主命（おおくにぬしのみこと）。御利益は除災招福。節分追儺とは除災招福・万民和楽の意味をもつ。

■三社大神社神璽　（写真右）

祭神は大国主命・市杵島姫命・豊宇気姫命。御利益は商売繁盛、全般系縁結び、美容健康、水難守護、航海安全、技能向上。

←■久伊豆神社
「節分追儺祭行事司奉仕帳」

■三社大神社の手水鉢

三社大神社にある手水鉢（参拝する前に手を洗うための水鉢）には 18 名の名前が刻まれている。彼らは、三社大神社に手水鉢を寄贈した者である。その 18 名の中に中村姓 4 名の名前が刻まれていた。彼ら 4 名前は先頭に刻まれていることから、中村一族が氏子の中心となって三社大神社に奉仕していたことがわかる。

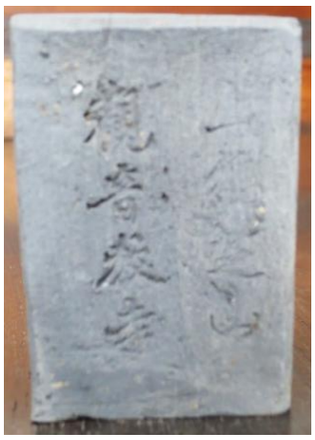
（右から）中村四郎左衛門、同 與左衛門、同 武兵衛、同 清七

● 神棚の灰仏 ●

中村家の神棚には、神札だけでなく仏像などのお守りも飾られている。灰仏とは灰仏とは、古い仏像や経典を焼いた灰に粘土を混ぜ、型にはめて造った仏像である。室町時代に記念品として、一時期作られていた。江戸時代になると、お守りとしての役割が強く、多くの寺社で作られ、門徒や檀家に配られた

■目護摩灰像

護摩とは仏教、特に密教における修法で、「焼く」「焚く」の意味がある。護摩で焼いた仏像や経典で作られたものが護摩灰仏である。



■金剛力士像

仏教では、守護神とされている。阿形と吽形の二体を一対として寺院の表門などに安置される。

■しゃもじ

日本の民間信仰において家族の食事の支度をする女性、つまり主婦の象徴とされてきた。これが広く「女性の象徴」とみなされた。このしゃもじには、「八ヶ岳山」という文字が焼かれている。神話において、八ヶ岳には磐長姫という女神が祀られている。つまり、「磐長姫」と女性の象徴である「しゃもじ」が結びつけられ、豊穣多産を願うお守りとして作られたと考えられる。

● かまどの神・かわやの神・出入り口の神 ●

昔から家のいたるところに神が宿ると信じられてきた。人々は、家の中に宿る神にお供え物をして神々の恩恵に感謝し、御札を貼って悪霊を追い払うなど、神の力に頼りながら家や家族の安全を守ってきた。中村家にも、そのような神々が祀られており、暮らしを守ってくれる神々の存在を知ることができる。

■かまどの神「竈三柱大神」

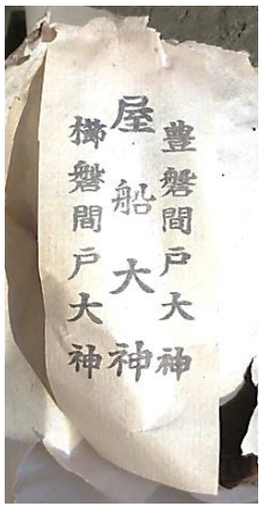
神道におけるかまどの神を竈三柱大神といい、仏教では三宝荒神と呼んだ。昔のかまどには安全装置などなく、家屋も木造であったため、毎日使うかまどの火から家屋を護ってもらうことはとても重要なことだった。竈三柱大神を怒らせると家財をすべて焼き払われるともいわれており、火を扱う場所に祀られた。中村家ではかまどの近くにこの御札を貼り、火から家を守っていた。竈三柱大神とは、奥津日子神、奥津比売命、火産霊を指し、奥津日子神、奥津比売命は竈の神、火産霊は火の神である。

■かわやの神「烏枢沙摩明王（うすさまみょうおう）」

密教におけるかわやの神を烏枢沙摩明王という。かわやは、現世とあの世の境界ともいわれていた。古くから不潔な場所であることから、悪霊や怨霊の出入り口とされてきた。そのため、かわやを烏枢沙摩明王の功徳によって清潔にし、家族の健康や安全を祈った。かわやには排泄物が流され、やがては生命のふるさとである海などの自然に辿り着くことから、新たなる生命の誕生の場とも考えられていた。そのため、かわやを清潔にしておくときれいな子どもが生まれるとも信じられていた。

■家を支える神「大黒天」

中村家には土間と座敷の中心に、つまり家の中心に一本の長い柱が通してある。これが大黒柱である。かつて、家を建てるときには土間と座敷の間の柱に大黒天を祀ったため、大黒柱と呼ばれている。大黒天は台所の神として祀られているが、これは大黒柱が台所にまで通してあることと合致する。



■出入り口の神

土間へ入る玄関の裏（室内側）にはたくさんの御札が貼られている。豐磐間戸大神、櫛磐間戸大神は門の守り神、屋船大神は建築の神とされている。玄関に貼ることで、悪霊などから家を守る意味があった。守護札は、家運長久・家内安全・当病平癒・安産など多種多様な御利益が存在した。

■屋敷神

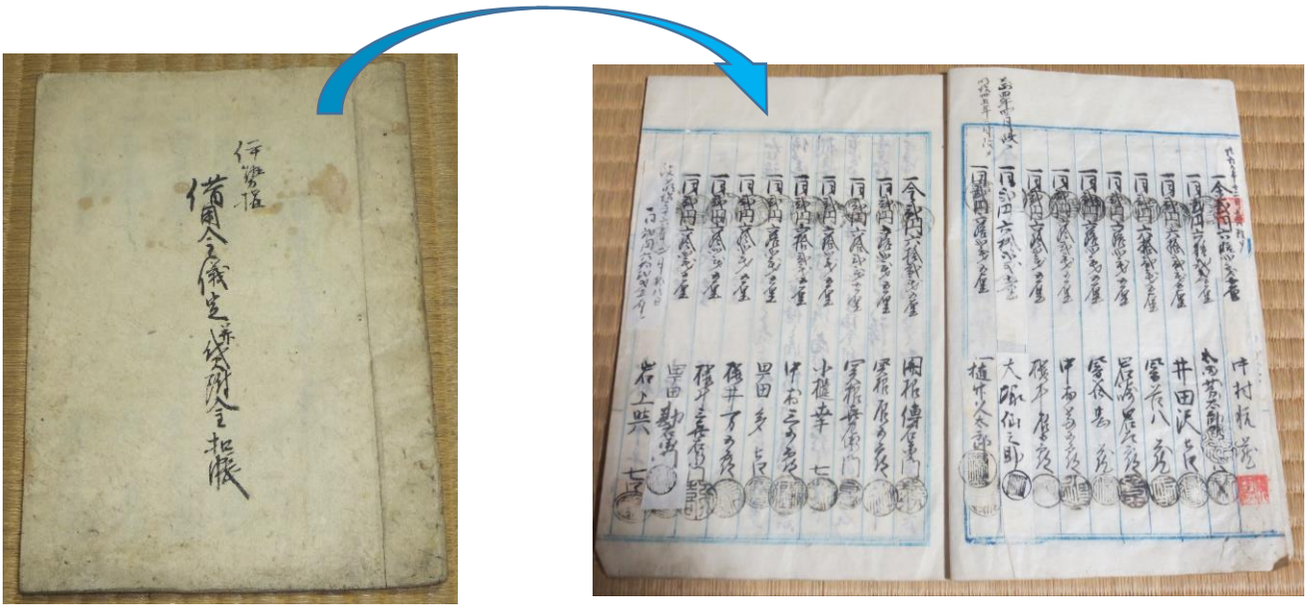
屋敷の一角または屋敷の付属地域に祀られている神。一般に屋敷と土地を守護する神とされる。現在最も多くみられるのは、各家に祀られる屋敷神であるが、原初的な形は、本家にのみ屋敷神があって一族でそれを守護神として祀るものであった。

● 中村家と伊勢講 ●

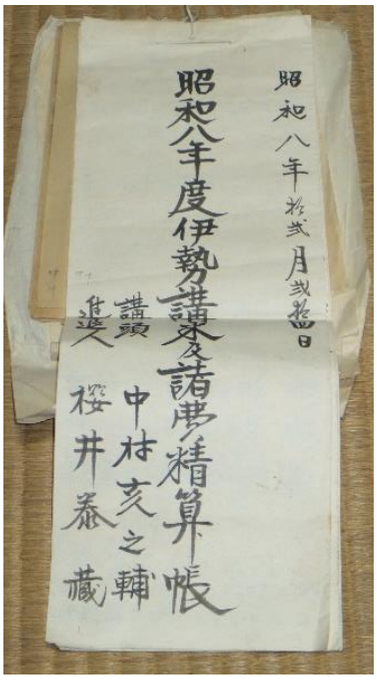
伊勢神宮を信仰する者同士が集まった集団を伊勢講という。伊勢神宮の祭神は、内宮が皇室の祖神である天照大神、外宮には食物・穀物をつかさどる豊受大神である。講中では、毎年代表者を選出し伊勢神宮に代参した。伊勢神宮までの道中は、観光地に寄り、お土産を買うなど今の旅行の原型となるものだった。伊勢参りにかかる費用は、講仲間から積立金を募り、旅費や伊勢神宮の御神札購入費などに充てられた。御神札は他の信徒に配布され、各家で神棚に祀られた。江戸時代に伊勢参りは、民衆たちの間で大変人気となった。それに伴い、伊勢神宮周辺では参拝者の世話をする御師の活動が盛んになった。

■中村家に残されている伊勢講の記録

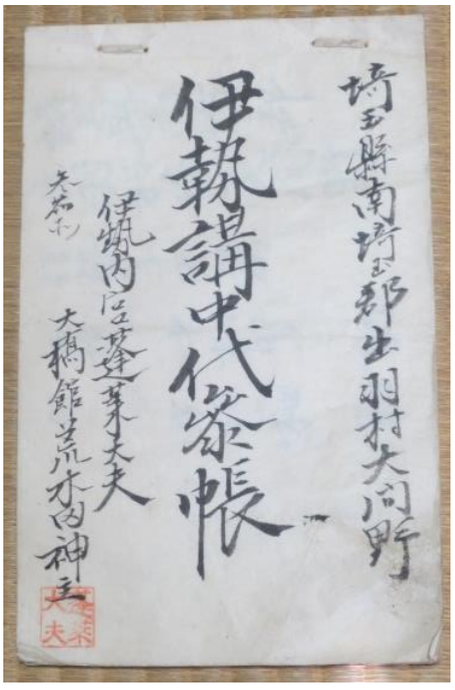
土蔵には伊勢講で使われた代参帳や精算帳など多くの史料が残されていた。これらによって、中村家が伊勢講において、講金の管理など講運営の中心になっていたことがわかる。



「伊勢講借用金儀定並兼貸附金控帳」（講の活動において金銭の融通が行われていたことがわかる。）



「伊勢講金及諸費精算帳」（昭和 8 年）



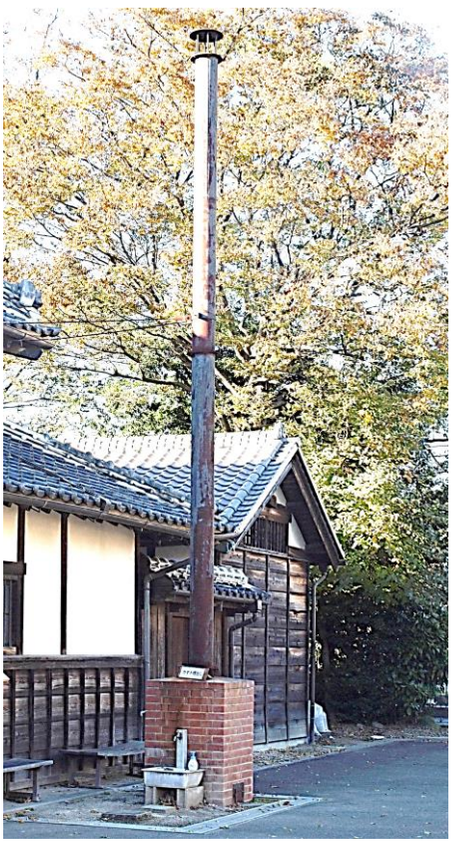
「伊勢講中代参帳」

5　家屋と部屋のつくり

● 土間内のつくり ●

←■ガラス戸

季節や天候に合わせて、風よけや彩光をしたりするために種類の異なった扉を重ねたもの。明治時代頃はまだ電気が普及しておらず、このような採光に適したガラス戸や障子が使われていた。



■かまどの煙突 →

土間のかまどから発生する煙を外に出すために設置された煙突（詳しい構造は 6 ページ参照）。風呂が勝手口脇にあり煙突下部についている水道から水を汲んで使っている。

● 奥座敷のつくり ●

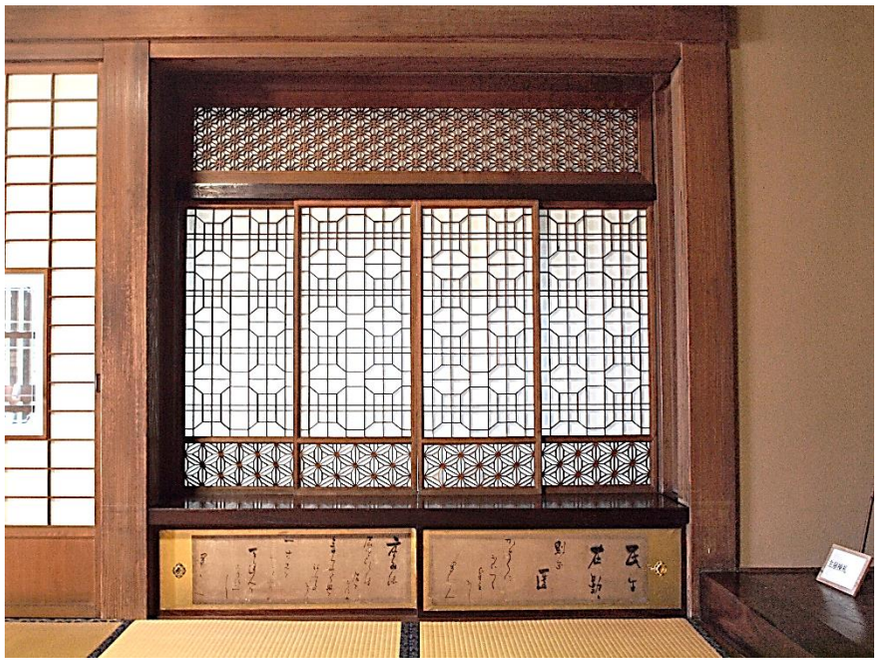
主に客間として使用する表座に対し、奥のほうにある座敷を奥座敷という。客を招き、話し合いの場などで用いられる。付書院・床の間・違い棚の 3 つを設備した書院造となっている。明るく開放感があり、内庭を眺められるようになっている。

■床の間

来客をもてなす奥座敷にあり、床の間を背にするのは最も身分の高い者である。「とこしえ（永久）」という意味もあり、その家の繁栄を象徴する。元々は掛け軸の前に置かれた押板と呼ばれる机のことで、主に絵画を鑑賞するためのものだった。

■違い棚

2 つの板を上下に分けて取り付けた棚。上と下で置くものが決められていて、板を分けることで光が全体に当たるように工夫されている。



■付書院

床の間わきの縁側沿いに備え付けられた座敷飾りのための場所である。付け書院は床の間の外部に張り出して設けることを基本とするが、外部に張り出さず壁面内に納めた形式もあり、平書院という。

■欄間

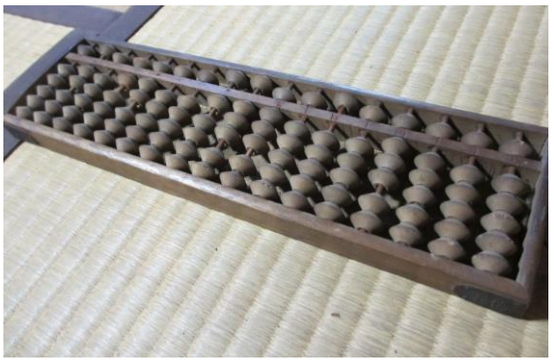
装飾的な効果がある。建物の採光側に用い、内部での採光通風を確保しつつ、視界を制限する効果がある。様々な図柄を彫り込んだもの。欄間の原型は平安時代にはすでにあったとされるが、本格的に用いられるようになったのは、鎌倉時代以降とされる。

● 寝間の勉強道具 ●

寝間と呼ばれる部屋は文字の通り、寝室・寝床を意味する。また子どもの勉強部屋としても使用された。日の光が入りにくいよう、部屋の中心部に位置することが多い。

■硯

墨を水で磨り卸すために使用する。主に石や瓦等で作られる。筆は、かつては鉛筆の代わりとして勉強などの際に用いられた。



■そろばん

昔の計算機。たまの数が数字を表し、足し算・引き算・かけ算・割り算ができる。はりの上の玉を五玉、下の玉を一玉という。室町時代の後半頃、貿易商の手で、長崎や堺（大阪）などの港町に持ち込まれ、その後広まることとなった。

■硯箱

硯や筆、墨、小刀、尺、暦などを入れておく箱。蒔絵、螺鈿、描金などが施されることもある。日本では平安時代から使用されるようになった。

■教科書

大正・昭和期の教科書の特徴として、読点「、」はあるが、句点「。」はない。上の写真は、算数・国語（書写）・理科・社会・音楽・英語の教科書である。小学校の低学年・中学年・高学年によって分けられている。

■かばん

幕末に輸入され、軍隊で活用されるようになった布製の背のうが始まりと言われている。こうしたかばんが使われ始めたのは、明治時代ともいわれる。

● 光と明かり ●

■無双窓 →

戸を開けることなく、通風、彩光、眺望などに使用できる。同サイズの板を前後に並べ、外側を固定し内側を引き戸とし、スライドさせて開け閉めする。雨戸や台所などに設けられることが多い。無双とは、表裏が同じことを指す。

（写真右上：開けた状態　写真右下：閉めた状態）

■障子・ガラス戸　↑

基本的に障子貼りになっているが、真ん中の部分はガラス貼りになっている。ガラスの部分から、座っている状態で外を見渡せている状態になっている。

■燭台　↑

ろうそく用灯火具の一種。ろうそくを立てて点火する台で、室内の照明や寝室の常夜灯として使用された。

■龕灯（がんどう）↑

江戸時代に発明された携帯用ランプ。正面のみを照らし、持ち主を照らさないため強盗が家に押し入る際や、目明かしが強盗の捜索に使ったとも言われ、「強盗提灯」と呼ばれた。内側には二軸ジンバルにより２本の鉄輪が回転し、鉄輪の中央にロウソクが固定されており、龕灯をいかなる方向に振り回してもロウソクは常に垂直に立って火が消えないような工夫がなされている。

● 板敷の間の風景 ●

茶の間とも呼ばれ、家族が食事をする場所。板敷とは床に板が敷かれていることで、広間や台所から近く、家の中でも長い時間この場所で生活していた。玄関からも近く、お客様や人の出入りも確認できるように障子の間にガラスが貼ってある。食器や道具は棚にしまってあり、いつでも取り出せるようになっている。

● 女中部屋の風景 ●

かつて女中さんが寝食をしていた場所。引き出しの中には、女中用の座布団の他に、家事で使えるよう様々な小道具が収納されていた。広間や座敷からは離れており、家主と生活する場は離れていた。また、土蔵や納屋（味噌部屋・道具部屋）から食料や道具をすぐ運び出せるように、女中部屋は蔵から近い場所にある。女中部屋の障子を開けると、土間との間の中庭に洗濯する場があったり、水桶など水仕事に必要な道具が置かれ、女中による家事仕事の動線が確保されている。

● 土蔵内のつくり ●

外壁を土壁として漆喰などで仕上げられるもの。　日本の伝統的な建築様式のひとつで、倉庫や保管庫として建てられる。

■床

内部は涼しくなっており、保存に適している。床が開くようになっていて、中に作物などを保存する。取り外しが可能で、洪水時は床下を乾かすことができるよう工夫されている。

■箱階段

階段の下の空間を有効利用する目的で引き出しや戸棚を取り付けた階段。江戸時代の初めの頃に登場した。明治以前は勾配の急なはしごのようなものが多かったが、特に 2 階建てが造られるようになった明治時代に町屋や農家で多く用いられた。

■観音扉

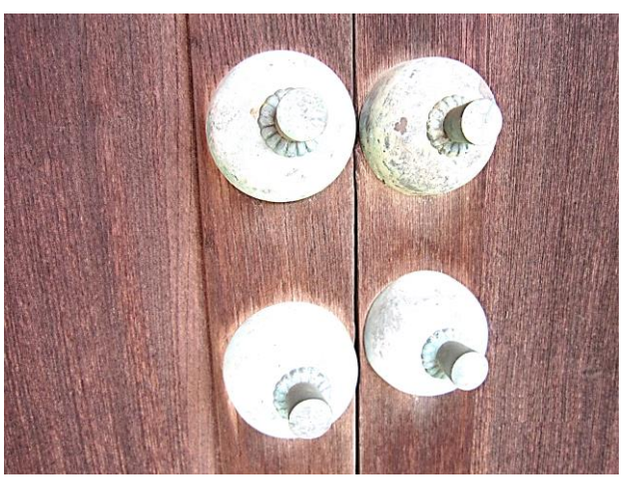
左右の扉を中央から開けるように作った開き戸のこと。火事が起こった際に火の粉が移るのを防ぎ、また扉が段上に作られることで二次災害を防ぐ。土で造られているため、燃えにくい。

■あげ船

河川の氾濫による洪水にそなえて用意された船。水害の時に住民の避難、家畜、穀物等を近くの高台へ運んだりした。普段は底を上にしてつるし、納屋や水塚（みづか）の軒先などにつるされていた。水塚とは、洪水の際に避難するための施設のことで、屋敷内にあらかじめ築き上げられた土盛りや、その上に設けられた小屋のこと。一旦洪水が起こると住人は長期にわたって水塚に避難しなければならないことが多く、そのためにここには避難生活に必要な生活道具や非常用の食料などを貯蔵していた。埼玉県内では、北は行田市や加須市から、南は八潮市や三郷市に至るまでの区域内に 1200 基を超える水塚が確認されている。中村家でも、かつて西の蔵が有った場所は、土盛りがなされ周囲よりも高くなっています。また土蔵自体も高床で洪水に対応するつくりになっている。

● 長屋門のつくり ●

武家屋敷で見られた門の形式。江戸時代に多く建てられ、名字帯刀を許された民家の門形式にもみられる。門の両側が長屋となっており、格子のある監視室から、訪ねてきた人を確認することができる。



■饅頭金物

別名「おっぱい飾り」といわれ、門の表側に出た鎹（かすがい）の頭を隠すための装飾品。門の風格を高める効果もある。

■ 執筆担当　（全体編集　六本木健志）

1　旧大間野村と中村家について　（六本木健志）
2　生活の道具　（石渡杏奈・越智悠夏）
3　農具～季節ごとの農作業（稲作）～（小野澤真奈・田端春奈・北郷由奈）
4　信仰～屋敷に祀られる神々～　（石橋侑子・黒須奈津美）
5　家屋と部屋のつくり　（神谷有紀・菅沼一徹・藤原沙也可・山本凌介）

大間野町　旧中村家住宅
「古い道具と昔のくらし」展示解説

2016 年 12 月　印刷・発行

作成者　文教大学教育学部社会専修
2016 年度 3 年次生（六本木ゼミ）

〒343－8511
埼玉県越谷市南荻島 3337
文教大学教育学部社会科研究室
TEL 048（974）8933　直通